

【全体概要】

露地ナシ栽培は化学農薬に依存した病害虫防除体系だが、ハダニ類の薬剤感受性低下及び黒星病の多発によりIPMの必要性が高まった。黒星病は落葉処理による耕種的防除、ハダニ類は天敵農薬による生物的防除を農薬による化学的防除と組み合わせ、愛知県の露地ナシ栽培に適合した総合防除体系を確立し技術導入を支援する。

新品種・新技術等の概要

越冬伝染源の罹病落葉を除去

ナシの最重要病害である黒星病の一次伝染源である前年罹病落葉を除去して、確実に病原菌密度を低下させる。



天敵農薬によるハダニ類の防除

化学合成農薬の感受性低下が最も著しいハダニ類を、天敵であるミヤコカブリダニによる捕食で密度抑制し、被害を低減する。



主な取組内容

プロウ、熊手により落葉を除去

ナシ生育期の4月から収穫期まで経時的に発病を調査、落葉除去の効果を慣行区と比較、甚発生条件で、処理区の発病が少ない傾向であった。

天敵農薬によるハダニ類の防除

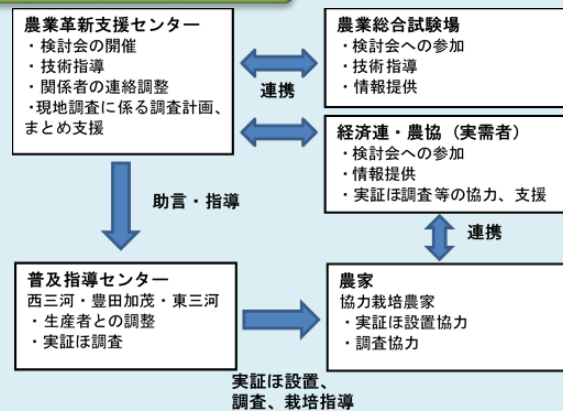
5月末に天敵農薬（ミヤコカブリダニ剤）を樹幹に設置、ナシ葉のハダニ類とカブリダニ類の生息数を5月から8月まで経時的に調査、ハダニ類の密度抑制効果を慣行区と比較、処理区でハダニ類の発生を抑制できた。

IPM導入の簡易マニュアルを作成

天敵農薬、落葉処理の2技術の導入マニュアルを各作成した。



実施体制図



農業革新支援センターが調整し、普及指導センター、県試験研究機関、経済連、農協、生産者と連携を図りながら、事業の進行管理等を行う。

実績と今後の対応

黒星病

甚発生条件では落葉処理区が慣行区より発病が少ない傾向であったが、少発生条件では落葉処理の効果が確認できなかった。本県は落葉以外の伝染源が主の可能性があり、対策を講じる。

ハダニ類

天敵農薬設置前に化学農薬を散布しハダニ類の密度を低下させることにより、前年の半量（100個/10a）設置でハダニ類の被害を抑制できた。しかし、天敵農薬は化学農薬に比べ高額なため、高値販売が可能な直売農家で導入が先行している。

今後の対応

ハダニ類の天敵利用、落葉処理による黒星病抑制とともに、技術導入マニュアルを作成した。いずれもIPMの一要素であり、導入する技術数を増やし総合的な取組を推進する。